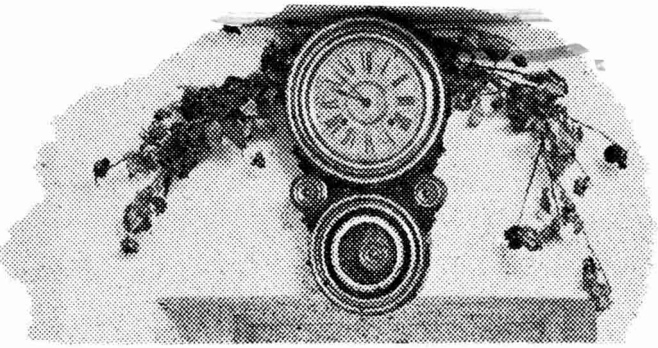
情事●森瑤子



情事●森 瑤子

集英社

情　事

1978年11月30日　初版印刷
1978年12月14日　初版発行

著者――森　瑤子

発行者――堀内末男

発行所――株式会社　集　英　社
東京都千代田区一ツ橋2～5～10　郵便番号101
電話――(03) 230～6361（出版部）238～2781（販売部）

印刷所――大日本印刷株式会社

定価――680円

© 1978 Yoko Mori, Printed in Japan
著者との了解により検印は廃止します
乱丁・落丁本はお取り替えします
0093―772176―3041

情

事

装丁　宇野亞喜良

写真　高橋　舞

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

Pour Saco et Bébé

夏が、終ろうとしていた。

見捨てられたような一ヵ月の休暇を終えて、秋への旅立ちを急いでいる軽井沢を立ち去ろうとしながら、レイ・ブラッドベリや、ダールの短編の中に逃げ込んで過ごした、悪夢のような夏の後半の日々を、考えている。そして、エルビス・プレスリーの突然の死をFM放送で聞いた八月の半ば、私の中で、青春の最後の輝きがまたひとつ、確かに消えていったのを、識った。

木洩れ日が、白く光りながら庭の芝の上へと降り注ぐのを、ほとんど上の空で見惚れていると、一瞬、心の波立ちは静まり、その微かな波間に隠された、たくさんの悲しい傷は、痛みの記憶を忘れたかのようにみえた。が、次の瞬間には、木立の中に吹く風のたてる、わずかな変化にさえも、心臓は激しく揺す振られ、すぐとま

た、あの辛かった言い争いや、あるいは、思い遣り深かった官能の数々の仕草や、恐ろしかった夕食(ディナー)の情景などの中に、再び、引き戻されてしまうのであった。

情事の終りが、あんなにも残酷だったのは、蒼ざめてついた、愚かな嘘のせい。人生に様々な思いを味わってきた、大人の女であったにも拘わらず、私は、レインの前に、完璧で、びくともしない、虚偽の積木の城を作り上げてみせることが、できなかった。

たったひとつ、真実があったとすれば、皮肉なことに、それは最後まで口にし得なかった言葉だった。レインを愛していたこと。出会いの、ほとんどその時から、彼に魅せられ、狼狽し、そしてレインが質問し、眩暈(めまい)の中で私は答えた。いいえ。結婚は、していないわ。

未練が、肉体的なものならば、なによりも時が確実に忘却へと導いてくれよう。あるいは、疑り深い指で、嘆きながら捲り続ける本の頁の行間に、私自身の痛みを

移し変えていくことは、できるだろう。

しかし、あのひとは――、レインは？

苛立ちを静めてくれる柔らかい風の吹かない、青山のあのひとの部屋で、軽蔑と苦笑の入り交じった解放感に、身を委ねているのに違いない、と思うと、吐き気が突き上げてくる。想像の中で、レインから受ける軽蔑と嘲笑とは、これまでに幾度となく、私の胃を、キリキリと絞りあげてきたのだ。

悲しみが、肉体の痛みにとって変りだすと、私はひとしきり泣いて、それから顔を洗った。無表情な眼が、鏡の中から私を見つめている。少なくとも、口紅をつけたり、マスカラで眼のまわりを黒々と隈取ることなどから、当分の間解放されるのは、わずかな救いであった。

六月の末の金曜日。その蒸し暑い夕暮れ時、夫は一人娘のエリカを連れて、一足先に秋谷にある別荘へ、行くことになっていた。私は土曜日の正午に、翻訳のテープを受け取る約束が入ってしまい、一日遅れて家族と合流する相談がまとまっていた。

「土曜の仕事は、できるだけ取らないようにしているんだけど」と私は、食料品の入った紙袋を、車のトランクに積み込んでいる夫の背中に向って、話しかけた。

「今度のテープは、アメリカのラジオドラマなのよ。ミステリーだっていうから、興味あるわ。あなたには悪いんだけど、是非やりたいの」

「いいさ。これが初めてで最後というわけでもあるまいよ。それより、魔法瓶にコーヒーを入れておいてくれたかい？」

「入っているわ、ポール。コールドチキンと、チョコレートケーキも少し包んであるから、エリカと車の中で召上って」

「ありがとう。それじゃ、先に行っているよ。今夜あたり、お義母さんのところへ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

でも顔を見せに行ったら、どうだい？」

「そうね」と私は、その夜、成城の母の家へ行くつもりはなかったので「外で何か、美味しいものでも食べようかしら」と、曖昧に答えた。その時、西脇俊輔の顔が、脳裏を掠めた。

夫が私の額に接吻して、私が、光線の具合で微かに濃い緑色に見える夫の瞳の中に、さり気ない目配せのようなさよならを告げると、彼は、小鳥のように取り留めもなく囀っている娘のお尻を軽くたたいて、クラウンの助手席に乗せ、白い手をヒラヒラと振って、そして走り去った。

家の中には既に、濃い倦怠に似た夕闇があった。私は、わずかの間、その陰の中に、ひっそりと佇んでいた。

あのように、極く自然に後めたさを演技し、冷めた心を巧みに羽撃かせ微笑に変えて夫を送り出したことが、厭らしい、安っぽい芝居じみたやり方のように思い返され、それに対する夫の、これもまた、作意的な無関心さの中に、私たち夫婦の、

牙を見せ合わないで済まそうとする共犯意識があった。それを私たちは、もう習慣のようにしてしまっていたが、それでもまだ、魂の何処か深い襞の陰で、不満や怒りに似たものが、拭い切れない焦燥となって、燻り続けていた。私は暫くの間、胸の前で両腕を交叉させ、自分自身を抱きしめるようにして、半ば放心し、更に立ちつくしていた。

そうだわ、俊輔に電話をしよう。

長い金曜の夜を、夫や娘と過ごしてやれないという後めたさは、忽然と消え去って、夕闇の醸し出す酔ったような物憂さの中で、私は、心の底に冷たい炎がめらめらと燃え上るのを、見ていた。それが蔓草のように肉体の節々に絡みついて、やがて血液が温められ、漲り、私は、急き立てられるように受話器に手を伸ばした。

それでも、いざダイヤルを回す段になると、例によって電話に対する嫌悪感が蘇って、長いこと、ぐずぐずと躊躇っていた。無性格にうずくまるこの黒い器械が、私の声を、感情を、どれほど正確に、あるいは不正確に相手に伝えるのか、何時も

不安だったし、そのつるりとして気味の悪い物体の中へ話しかけることは、ほとんど恐怖に近かった。

俊輔とは、昨年の九月末以来、話をしていない。彼とは、そんなふうに、大学を卒業してから年に二回か、多くても三回、電話を掛け合ったり、お互いの顔色をなんとなく探り合ったりするために、ちょっと会って、すぐとまた、別々の生き方の中へ帰っていくという、淡い友情が、ずっと続いていた。

芸術大学の建築科に在籍していた当時の西脇俊輔は、撓やかな肉体と、油断のない鷹のような表情をした若者だった。同じ芸大の音楽学部で、チェロを専攻していたこちらの方は、まことにとりとめもなく、ただ陶酔(うっとり)した濃茶色の眼を大きく見開いていただけの、世間知らずの娘で、校庭の壊れた柵の所で出会ったことがきっかけで、恋におち、誰もが一度は通りすぎる青春の、ありとあらゆる感情の嵐を味わい尽し嘗め尽した。学生生活の終りに、二人は結婚するものとばかり信じきっていた友人達や、お互いの両親の期待を、もののみごとに裏切って、三年に亙った交際

に終止符を打ったのだった。

俊輔は、卒業と同時に学生時代に関わりのあった一切から解放され、新しい世界へと、その才能の可能性を問うために、幾分、悲しみに似たものをその痩せた肩の辺に漂わせているような後姿を見せはしたが、とにかく、一人、ハーバード留学へと、出発していった。その遠ざかる背に、私が見たのは、過去に対する毅然とした拒絶であり、確かな自由を手に入れた、一人の見知らぬ青年の、甘さのない決意だった。

そして私も、馴れ合いや、怠惰や、苦い嫉妬や猜疑心などから、一気に解き放された。当初は、そのよりどころのない空虚さに、恐れ戦(おの)き、未来を失ってしまった、という若い錯覚のために、我が身を、どう扱って良いのかさえ、わからなくなっていた。この両腕を、下げていたら良いのか、上げたら自然なのか、見つめたら心が安まるのか、胸に抱きしめたら救われるのか、わからなかった。そして仕方なくそれを振り上げて、部屋の白い壁を力のかぎり打ち続けるしかなかった日々。

俊輔を、あれほどあっ気なく解放してしまったのは、ただただ、自分のプライドを守るだけのためだった。そして、あの日々の苦しみの中から私が得たものは、愛にはもちろん、人にも、友情にも、芸事にも、そして人生一般の諸々の事々にも、深く執着をしすぎまい、ということであった。

やがて自分自身の小さな翼で、とにかくも飛んでみようと決心がついた時、手始めにしたのは、チェロをやめることだった。才能に明白な限界があったし、かといってオーケストラの一隅に自分自身を埋めてしまうのは、なんとしても嫌だった。

その決意は両親を、中でも父を仰天させたが、自分のパンのことで、金輪際迷惑はかけないからと、諦めきれずにいる父を、強引に納得させた。

これで音楽を演奏する立場から聴く側に回ることができるのだと、心からホッとした。それまで、ひたすらに積み重ねてきた十七年の音楽生活。思い返すだけでも血の滲むような、反復の世界。練習は単調で辛かったが、音楽は既に、肉体を被う殻のように私を、その内部に閉じ込めてしまっていたので、固い透明な殻の中から

抜け出すことは、ほとんど、肉体的な苦痛をともなった。
脱皮を終えた時のその疲労感は、しかし、俊輔から押しつけられた不本意な解放感よりも、はるかに大きな安堵でもあった。
再び、私が彼に連絡を取ったのは、それから三年後の、結婚の報告の時だった。

西脇俊輔の建築事務所へ電話が通じたのは結局、七時半近くなっていた。
「ヨーコです。まだお仕事中？」
「おお！　どうした」と、俊輔は十年来、全く同じように受話器のむこう側から、少しも躊躇(ためらい)のない声を返してきた。
「元気にしてます。今夜、忙しくなかったら、食事しない？」
「いいよ。で、おまえまた、亭主と喧嘩でもしたのか？」
「どういたしまして。そんな時ばかり、電話するわけじゃないわ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.